



2015年3月4日放送

印象に残る症例①

JA 静岡厚生連静岡厚生病院産婦人科診療部長 中山 毅

ツムラ補中益気湯の夫婦同服により、妊娠成立に至った不妊症例の報告

私は特に不妊症や産科領域の漢方診療を専門としております。本日は不妊症漢方治療の中で、特に心に残っている症例の一つであります、「ツムラ補中益気湯を夫婦ともに同服してもらい、妊娠成立に至った症例」につき、報告させていただきます。よろしくお願いたします。

まず症例の背景ですが、妻は35歳、夫は37歳の夫婦です。2年8ヶ月におよぶ不妊症にて、私の外来を初診されました。

既往歴としまして、妻は冷え性と月経不順があり、当帰芍薬散を内服されています。初診時の臨床所見ですが、妻は身長163cm、体重50kg。基礎体温は2相性でしたが、周期が40日から50日と月経不順を認めました。血液検査は、ヘモグロビン値は12.1mg/dlと貧血はありませんでした。また黄体ホルモンの値が5.3ng/mlと低値でありました。東洋医学的診察では、食欲不振あり。便秘はなし。手足の冷え、胃腸虚弱や全身倦怠感といった症状を認めました。舌診は淡白色で舌痕あり。脈診は沈弱。腹壁は軟。胃部振水音を認めました。虚証で、寒。気虚、水滯と診断しました。

一方で夫は身長174cm、体重65kg。精液検査にて精子濃度が2400万、運動率が20%と精子無力症の所見を呈しておりました。東洋医学的には、仕事の疲労による倦怠感、食欲不振を認めていました。舌診は淡白色で白色の舌苔を認めました。腹壁は軟。胃部振水音

を認めました。虚証で気虚と診断しました。夫婦ともに、不妊期間が長く、非常に疲弊しておりました。夫の帰宅も遅く、日常会話を交わすことすら少なくなっていたとのことでした。そのためか、夫婦ともに虚証で気虚を呈していました。

さて処方ですが、精子運動率の向上、倦怠感の軽減を目的として、夫にツムラ補中益気湯を3包分3にて処方しました。妻は冷えや水滞もあり、当帰芍薬散を考慮しましたが、過去に内服しても、月経不順が変わらなかったことも考慮し、さらにこの夫婦の不妊治療に必要なことは、妊娠に向けて、夫婦ともに気虚を治すことが肝要であると判断し、敢えて夫と同様に、ツムラ補中益気湯を同服といたしました。

内服に伴い、夫の精液検査の数値は精子濃度、運動率ともに増加し、3ヶ月後にはそれぞれ3600万、86%まで増加しました。また妻の黄体ホルモン値も3ヶ月の時点では17.0ng/mlと増加しておりました。夫婦ともに倦怠感が補中益気湯の内服により軽減し、夫婦間の会話も増えて、妊娠に向けての取り組みや将来妊娠した時の話なども、出来るようになりました。3周期人工授精を実施し、妊娠が成立しました。なおその後、妊娠中も夫婦ともに補中益気湯を内服し、順調な経過でありました。

<考察>

不妊症とは、妊娠を望んでいる夫婦が、正常な夫婦生活を経ても妊娠に至らない状態です。日本では一般的に2年以内に妊娠しない場合を、不妊症とすると定義しています。不妊の原因は、男性と女性因子に分けられます。女性だけに原因があることは41%、男性だけに原因があることは24%、そして男女共に原因があることは24%とされます。男性因子も不妊の夫婦の約半数に認めていることから、妻のみに限って治療を行っていくのではなく、夫も含め、夫婦ともに妊娠を目指し、治療を行うといった姿勢が必要になります。

また不妊治療が長期になればなるほど、ストレスが高まり、気の異常を呈する夫婦が増えてきます。気が巡らなくなる気滞の状態が長く続くと、やがて気が不足し、気虚を呈するようになります。その結果、気のみならず血や水も滞ったり、巡らなくなるといった異常を呈するようになり、さらに妊娠しづらい悪循環に陥っていきます。不妊で来院される方の約1/3程度に気滞や気虚が認められます。

さて、漢方を家族間で同服し、お互いの治療を行う母子同服という治療法があります。16世紀に中国の保嬰撮要という小児の医学書を原典とし、子供の夜泣き、疳の虫の治療として、抑肝散を母子とも一緒に服用し、治療します。夜泣きや疳の虫の原因が子供だけにあるのではなく、母親の精神状態が子供に悪影響を及ぼしている。このように家族は他の家族に影響されることが病因となっていると考えられます。不妊症夫婦も同じように、妻と夫のお互いの体調、特に治療が長期になればなるほど、妊娠に至らないといったプレッシャーからくるストレスが影響しあい、ひいては夫婦ともに同じ病態に変化するのではないかと推察しております。

さて症例に戻りますが、今回提示したご夫婦は2年8ヶ月という長い不妊期間により、

お互いに気虚を強く呈するようになっていました。ツムラ補中益気湯を夫婦同服したところ、倦怠感や食欲低下も軽減し、改めて不妊治療に対して、前向きになることができました。気虚の状態から夫婦ともに回復され、その結果妊娠成立に至ることができました。

補中益気湯は、弁惑論に記載されている漢方薬で、主に虚弱体質、疲労倦怠、病後や術後の衰弱に用いられます。特に男性不妊の原因である、乏精子症や精子無力症に対しての効果が複数報告されており、男性不妊に対する漢方療法として、広く用いられています。

一方女性不妊に対しましては、主に血を治^{けつ}する処方である、当帰芍薬散や温経湯が使われています。しかし不妊女性のバックグラウンドには、脾胃虚といった胃腸機能の低下があると考えられております。胃腸虚弱の女性は、十分に血を産生することが出来ず、また気血水が循環しなくなることから、気滞や気虚、血虚、水滞を呈することが多いと考えられます。今回の症例でも、表面的には冷えや貧血などの症状があり、当帰芍薬散を内服していました。冷えや貧血は改善しましたが、月経不順や不妊症は治癒しませんでした。しかし補中益気湯を内服することにより、脾胃や気虚が改善し、月経周期も正常化し、その結果、無事に妊娠することが出来ました。

一般的に夫婦は共同生活が長くなればなるほど、顔も性格も似てくるといいます。科学的には証明されておりませんが、同じ屋根の下、同じ食生活をすることから、夫婦の性格や体質といった特徴が似てくるのではないかと考えます。東洋医学的治療基準となる証においても、必然的に夫婦が類似していくこともあるのではないかと推察しております。抑肝散による母子同服の概念はとても有名であります。同様に補中益気湯のような気の異常を治す漢方を用いて、夫婦同服することにより、不妊症治療に用いられる可能性があることが示唆されました。